

平成 28 年 7 月 1 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

宇部南方沖断層の長期評価

1. 断層の位置・形態

宇部南方沖断層は、山口県宇部市の南方沖に分布する活断層である（図1）。宇部南方沖断層の長さ約 15 km で、概ね南北方向に延びる。宇部南方沖断層は左横ずれを主体とし、西側隆起の成分を伴う断層である。

2. 断層面の地下形状

宇部南方沖断層の断層面の長さは、海底面で確認される断層長さと同じ約 15 km であると推定される（表1）。断層面の傾斜はほぼ鉛直と推定される。断層面の幅は不明であるが、地震発生層の下限を目安とすると 15-20 km 程度の可能性がある。

3. 過去の断層活動

宇部南方沖断層の平均的な横ずれの速度は不明であるが、上下方向のずれの速度は、概ね 0.1 m/千年の可能性がある。なお、宇部南方沖断層の最新活動時期、平均活動間隔は不明である。

4. 活動時の地震規模

宇部南方沖断層は、全体が1つの区間として活動する場合、マグニチュード 6.8 程度の地震が発生する可能性があり、その際には断層近傍の海底面に 2m 程度の横ずれと断層の西側が東側に対して相対的に高まる段差が生じる可能性がある。

5. 地震後経過率（注1）

宇部南方沖断層では、過去の活動が不明であるため、地震後経過率や地震発生確率を算出することができない。

6. 今後に向けて

宇部南方沖断層については、最新活動を含めた過去の活動について、ほとんどデータが得られていないため、地震後経過率や地震発生確率を評価できていない。よって、過去の活動履歴に結びつく資料を蓄積していく必要がある。また、宇部南方沖断層の北西延長の陸域には、山口県山陽小野田市を延びる菊川断層帯が位置し、両断層が一

連の断層帯を構成する可能性もある。今後、宇部南方沖断層の北西海域の断層分布を検討し、菊川断層帯との関係を明らかにする必要がある。

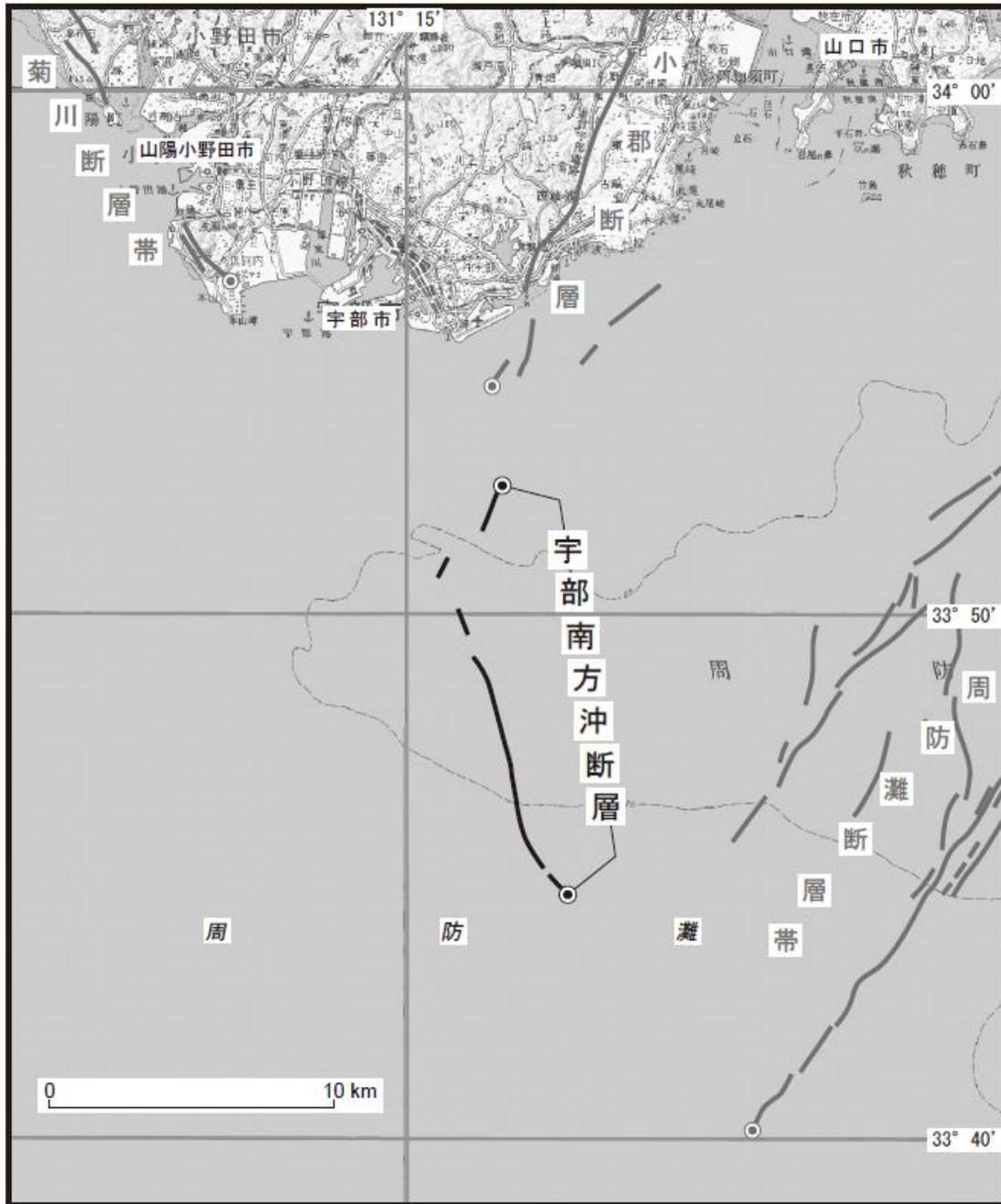


図1 宇部南方沖断層の位置

●：断層の端点

基図は国土地理院発行数値地図 200000 「山口」、「中津」

表 1 宇部南方沖断層の特性

項目	特性	信頼度 (注2)	根拠 (注3)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	山口県宇部市の南方沖に分布する断層（海上保安庁水路部（1999）による F.10断層、F.12断層など）		文献1、2、3による。
(2) 断層の位置・形状	断層の位置 地表（海底）： （北端）北緯33° 52.7′ 東経131° 17.0′ （南端）北緯33° 44.9′ 東経131° 18.6′ 長さ 約15km 一般走向 N10° W	○ ○ ○ ○	文献1、2、3による。 一般走向は断層帯の両端を結んだ方向。
(3) ずれの向きと種類	左横ずれ断層（西側隆起を伴う）	○	文献1、2、3の記述及び周辺の地質構造などから推定。
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直	○	文献1、2、3の記述及び周辺の地質構造などから推定。
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約0 km 下端の深さ 15-20 km程度 断層面の幅 不明	◎ △ —	地震発生層の下限深さ15-20 km程度。
(3) 断層面の長さ	約15 km	○	地表の断層長さから推定。
3. 断層の過去の活動			

(1) 平均的なずれの速度	概ね0.1m/千年(上下)	△	文献3に示された地層のずれの量から推定。
(2) 過去の活動時期	不明		
(3) 1回のずれの量	2m程度(横ずれ成分)	△	断層の長さから推定。
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	断層全体で1区間	△	断層帯の位置関係・形態等から推定。
4. 活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模	マグニチュード6.8程度	△	断層の長さから推定。
5. 地震後経過率			
地震後経過率(注1)	不明	—	

注1：最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

注2：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注3：参考文献

文献1：地震調査研究推進本部地震調査委員会(2008)：「宇部沖断層群(周防灘断層群)の評価」. 29p.

文献2：海上保安庁海洋情報部(2004)：「平成15年度 周防灘東部深層音波探査 報告書」. 70p.

文献3：海上保安庁水路部(1999)：「平成10年度 沿岸海域活断層調査「宇部南部」 資料整理報告書」. 30p.